

「月の香りの狩人について」

愉悦部筆頭

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

BloodBornの主人公はプレイヤーの数だけいる。

ロールプレイの数だけ違う狩人が存在している。

協力プレイ時は並行世界の狩人を読んでいる。

でも、どの並行世界でも青ざめた血を求めて、狩りを全うしている。

そこから、クトゥルフ神話要素を足して考えてみた設定のお話。

駄文ですがよろしく願います。

目次

| | |
|---------------------------|---|
| 「血塗れの名も無き誰か、或いは狩人の手 記」 | 1 |
|---------------------------|---|

「血塗れの名も無き誰か、或いは狩人の手記」

血と、悪夢と、何よりも狂気で満たされた獣狩りの夜に、一人の狩人が其処に居た。それは、遠い外からヤーナムに訪れた、異邦の服を纏ったもの。

それは獣を狩り、人を狩り、眷属を狩り、上位者を狩り、悪夢を、夢を狩った。そんな狩人が、なぜヤーナムへやってきたのか、その目的は分からない。

病を癒すため、血の医療を求めて？

青ざめた血という何かを求めたから？

狩りの血に酔うために？

夢の秘密に惹かれてしまったから？

或いは、目的や理由なんて無いのかもしれない。

他の狩人と共闘することもあれば、気紛れに敵対し、狩る事もある。

狩人狩りの意志を継ぎ、血に酔うものを狩り。最期の血族となり、穢れを集め。

清き処刑隊として、穢れた血族を殲滅して。連盟の一人として、蔓延る虫を潰す。

獣に抱かれ、人ならざる爪を振るい。何かの苗床となり、神秘の秘儀を扱う。

細身の少女であれば、屈強な大男であったり、

老いさらばえた老人、上品な紳士や淑女なこともある。

そんな正体不明の狩人。

けれど一つだけ、月の香りがする事だけは変わらない。

その狩人のやっていること、やろうとしていることは分かる。

狩りを全うする事。

そのために青ざめた血を求めている。

なぜ、私がこんな思考をしているのかは、自分でも分かっていない。

ただ、私はその狩人の事が分からなくなってしまった。

男だという記憶もあれば、女だという記憶もある。

人並外れた膂力を持って獣を狩っていたという記憶もあるが、

技術をもって足りない力を補っていたという記憶もある。

好奇心は猫を殺すというが、疑問を解決するためにも、

私はそんな狩人が何者なのか、調べてみようと思う。

今夜も黄金、いや、まるで血のように赤く、紅く、朱い真紅の月が私を見下ろしている。

そう、私は知ってしまった。

瞳を得てはいないけれど、狂ってしまったから。

獣狩りの夜の、隠された秘密を、青ざめた血の夜を。

「怪物と戦う者は、その過程で自分自身も怪物になることのないように、気をつけなくてはならない。

深淵を覗く時、深淵もまたこちらを覗いているのだから。」

あの狩人は「深淵」、そんな生易しいものではない「混沌」であった。

それは在るけれど、無い。月に吠える怪物、上位者と呼ばれるもの、いや「神」というべきもの。

そんな、理解外の存在が、黒く、飲み込まれそうな底なしの孔が空いた貌で、

にたにたと嗤いながら、こちらを覗いていたのだ。

これは、どこにでもいる狂人の妄想かもしれない。

それでも、誰かに知っていてほしい。

確かに私という存在がいた証を残しておきたい。

この世界は狂気に満ち溢れている。

獣狩りの夜の青ざめた血の空だけではない。

空に輝く太陽は昏く黒い、海には底知れぬ何かが存在している。

それでもどうか、私のように狂気に負けないでほしい。